

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊 25 年目
創刊 1989 年 Nr. 291
GEKKAN-WIEN 2013年9月号



Gustav Klimt - Sonja Knips, 1897/1898 - Öl auf Leinwand - 145 x 146 cm

© Belvedere, Wien

ベルヴェデーレ下宮 特別展「デカデンツ Dekadenz」にて展示



杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 24



七月三〇日〜八月二日まで、中国成都において、中国原子力学会、米国機械学会及び日本機械学会の主催により第二回原子力工学国際会議が開催された。本会議は原子力産業界のニーズに対応して原子力の広い分野を対象として、世界の最新技術に焦点を当て、第一回会合から一九九一年の東京での第一回会合から日米欧中持ち回りでほぼ毎年開催されている。中国での開催は、二〇〇五年の北京、二〇一〇年の西安に続いて今回が三回目である。地元中国から約八五〇名を筆頭に三十二ヶ国から約千三百人の参加があり、我が国からは産業界、研究所、大学等から約百四〇名の出席があった。京都大学からは、同僚の功刀教授と筆者ら三名が参加した。



筆者は三日目の福島事故に関連するセッションで「福島事故後の重要なシビアクシデント研究」と題する講演をするともに、セッション議長を務めた講演に対して活発な質疑があり、議長や聴衆としてもいくつか質問やコメントをした。また、十あるパネルセッション中最大の九名のパネリストを擁する「多様なシビアクシデントマネジメント」の議長を務めた。事前にパネリストとメールで情報交換することにより、時間内に議論を収めるとともに、フロアから適切なコメントをしてもらうことが出来た。最後に議長から全パネリストに質問をすることで幸いにも議論が盛り上がり上がったと思う。昔の研究室にいた五名、うち一名には約二十年ぶりに会えたのが個人的には嬉し出来事であった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の教会と神社・仏閣について述べてみたい。ウィーンでは市のシンボルとも言わばゴシック様式のシユテファン大聖堂、バロック建築の傑作カールス教会、ウィーンでもっとも古いプレヒト教会、王宮内の宮廷教会でハプスブルク家当主の心臓が納められているアウグスティーナ教会、王宮前にあるロマネスク様式の聖ミヒヤエル教会、高さ百メートルの二つの尖塔が印象的なヴォテューフ教会、内部は豪華絢爛だが小ぶりのベーター教会など、二十以上の名の知れた教会がある。多くが世界遺産に登録されている歴史地区内にある。市民や観光客の祈りの場としてだけでなく、日曜日などにコンサートを行っている教会が多い。

一方、京都の著名な神社・仏閣としては、世界遺産に登録されている上賀茂神社、下鴨神社、東寺、清水寺、醍醐寺、仁和寺、高山寺、西芳



寺、天龍寺、金閣寺、銀閣寺、龍安寺、西本願寺がまず挙げられよう。これ以外にも、京都大祭の祇園祭や時代祭と関連する八坂神社や平安神宮、菅原道真を祀る北野天満宮、千体の千手観音像が並ぶ三十三間堂、洛北随一の大寺院大徳寺、石川五右衛門で有名な南禅寺なども外せない。何しろ京都には寺は二八八、神社は八二もあるので選ぶのは極めて難しい。神社・仏閣には祭りが付く物なので、年中どこかで祭が行われている。両市の教会も神社・仏閣は、市民に親しまれているだけでなく、観光にも絶大な貢献をしている。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、シユテファン大聖堂前で来客と待合せをして中を案内したり、あちこちの教会で開かれるコンサートもよく聴いた。京都の学生時代には、アリスホテル一部に所属した関係では、再生時に祇園祭の船鉾をアルバイトで引いたことがある。最初の下宿は住吉神社の隣であり、通学は真如堂脇を抜けて吉田神社の中を通っていた。両市の教会や神社・仏閣に関して貴重な体験ができた幸運に感謝しつつ、カールス教会を描いたスケッチを掲載させていた。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■